

## マンズフィールドとデ・ラ・メア

水田圭子

キャサリン・マンズフィールドの周囲には、批評家であった夫のジョン・ミドルトン・マリを初めとして、S・S・コテリアンスキーやヴァージニア・ウルフ、また、D・H・ロレンス等、常に多くの一流の文学者が存在した。そのようにして彼女が文学的親交を持った人達の中でも、ウォルター・デ・ラ・メアは特に重要な存在である。とりわけ晩年に彼女は、デ・ラ・メアに対し深い尊敬の念を抱いていたことが、残された日記に示されている。

Read W.J.D.'s poems. I feel very near to him in mind. (W・J・D [訳注 デ・ラ・メアのミドルネームはジョン] の詩を読む。私は胸の中で、自分が彼に大変近いと感ずる。) (1922年1月1日)<sup>1)</sup>

Wrote to W.J.D. Why it should be such an effort to write to the people one loves I cannot imagine. It's none at all to write to those who don't really count. But for weeks I have thought of DelaMare, ...I told him in this letter how much I thought of him. I suppose it is the effect of isolation that I can truly say I think of W.J.D., Tchekhov, Koteliansky, HMT and Orage every day. They are part of my life. (W・J・Dに手紙を書いた。愛する人に手紙を書くのがどうしてこんなに大変なことなのか、自分でもわからない。実際、どうしても良いような相手に書くのは、まるで苦勞が要らないのだ。この何週間か、私はデ・ラ・メアのことを考え続けた・・・

私はこの手紙に、自分がどんなに彼のことを思っているかを書いた。私がW・J・DやチャーホフやコテリアンスキーやHMT [訳注 H・M・トムリンソン]やオレイジのことを本当に毎日考えることができるのは、私がこうして独りきりでいるからなのだと思う。(1922年1月20日)<sup>2)</sup>

彼女はこの日記を書いた1年後には、もうこの世の人ではなかった。そして、当時彼女が最後の力を振り絞って書き上げた短編は、未完のまま残された作品の断片と共に、『鳩の巣、その他』(*The Doves' Nest and Other Stories*)として、彼女の死後刊行されたのだが、この遺稿短編集はデ・ラ・メアに献呈されている。おそらく編集したマリが、マンズフィールドの遺志を汲み取って、そのような献辞を付したのだろう。これは、今引用した日記の記載と共に、マンズフィールドとデ・ラ・メアの深い文学的なつながりの証明として、既に十分知られている事実である。しかしながら、これ以上の詳細な2人の影響関係については、実は必ずしも明らかにされていない。

マンズフィールドがデ・ラ・メアを知ったのは、マリを通じてであったろうと推測される。無論、マリに教えられる以前にデ・ラ・メア作品を読んでいた可能性もあるが、少なくとも彼女が実際にデ・ラ・メアに会う機会を得るためには、マリの存在が必要であったはずだ。1910年代の初め頃から、マリとデ・ラ・メアの2人は、『ウェストミンスター・ガゼット』(*Westminster Gazette*)に関わりを持ち、知人となっていた。デ・ラ・メアは既に、同紙で批評を担当しており、当時まだ無名であったD・H・ロレンスの作品を推奨するなど、重要な役割を果たしている。一方、マリも1914年に同紙に正式に評論者として迎えられた。また、デ・ラ・メアは『タイムズ・リテラリー・サプリメント』(*Times Literary Supplement*)でも批評を行っていたが、後にマリはこちらへも招かれて、文芸評論家としての地位を固めることになる。デ・ラ・メアはマリより

16歳年長であり、マリは、批評家としても優れた資質を有したデ・ラ・メアに学ぶところが多かっただろう。無論、彼の詩人としての卓越した才能には当初より、最大の敬意を払っていた。マリの批評の態度は普通、ロマン主義と分類されるが、『ドストエフスキー』(Dostoevsky)によって世に出たこの主情的な分析家は、現実逃避を潔しとしなかった。それゆえ、自然を抒情的に歌い上げながらも、近代の苦悩や社会の困難に対して超然としていた、いわゆる「ジョージ朝の詩」を、マリは、「欺瞞的」として、好まなかった。<sup>3)</sup> デ・ラ・メアは今日、ジョージ朝詩人の代表的存在と見なされているのだが、マリにとって、彼だけは別だった。F・A・リーの手になるマリの伝記では、彼にとって詩人としてのデ・ラ・メアは、キーツやボードレルと同じくらい重要な存在だったと述べられている。<sup>4)</sup> マリは1911年の6月に、創刊した雑誌『リズム』(Rhythm)にデ・ラ・メアを迎えたのを初めとして、その後も自らの関係する文芸誌に寄稿を依頼し、その深い信頼関係は、1956年にデ・ラ・メアが没するまで変わることはなかった。(ちなみに、マリはその後を追うように、翌1957年に亡くなっている。)

現存するマンズフィールドの資料では、1915年12月12-3日付のマリ宛の手紙に初めて、デ・ラ・メアの名が現れている。<sup>5)</sup> そして、いかにもマリと共通の知人について語っているような、その親しげな文章から、少なくとも、この頃には既に、彼女はデ・ラ・メアと親交のあったことがわかる。1918年頃に、デ・ラ・メアがマンズフィールドを訪ねて来た時の様子が、LMによって残されている。

Among others who came to see Katherine was Walter de la Mare. He came to tea, bringing some of his children. As this was rather more of a family affair, I had tea with them and helped to entertain the young people while de la Mare and Kath-

erine talked. It was at this tea that the poet noticed Katherine's queer little habit of holding her spoon in the air after stirring the cup. She was in the middle of a sentence, probably, and could not remember to put it down. There is an allusion in his poem *To KM*. (キャサリンに会いに来た人の中に、ウォルター・デ・ラ・メアがいます。彼は子供を連れて、お茶の時間にやって来ました。家族どうしのおつきあいという感じだったので、私もお茶の席に加わり、キャサリンとデ・ラ・メアが話している間、子供達のお相手をしました。このお茶の席で詩人は、キャサリンが茶碗をかき回した後、スプーンを宙に浮かせたままにするという、ちょっとした奇妙な癖があることに気づきました。彼女はきっと、何か言いかけた途中だったので、スプーンを降ろすことを忘れてしまったのだと思います。デ・ラ・メアの詩「KMに」に、そのことが書かれています。)<sup>9)</sup>

確かに彼女は、話に夢中であった。「KMに」を読めば、マンスフィールドばかりでなく、デ・ラ・メアもマンスフィールドを相手に、想像の世界に没入していたことがわかる。2人はこの時、「野の馬」をキーワードにして、互いにどんな馬の姿が想像できるかという、イメージのゲームをしていたようである。デ・ラ・メアのこの詩は、大半が彼自身の想像する馬の描写で占められているが、詩の冒頭と結尾は、現実に目の前にいるマンスフィールドの姿を描いて、それぞれを、いわば自己のイメージの世界へのプロローグとエピローグにしている。そのプロローグの方——第1節のみ引用しよう。

We sat and talked...It was June, and the summer light  
Lay fair upon ceiling and wall as the day took flight.  
Tranquil the room — with its colours and shadows wan,

Cherries, and china, and flowers: and the hour slid on.  
Dark hair, dark eyes, slim fingers — you made the tea,  
Pausing with spoon uplifted, to speak to me.  
Lulled by our thoughts and our voices, how happy were we !

(私たちは座って話していた・・・それは六月のこと  
日が傾くと夏の光は天井や壁に明るく残って  
部屋はひっそりとし——桜桃や陶器や花の飾られた  
室内の色彩や陰はやわらいで 時は静かに流れた  
黒い髪と黒い瞳と細い指——あなたはお茶を淹れて  
スプーンを宙に浮かせたまま私に話しかけていた  
自分たちの想いと声とにここちよく揺られて至福の時を過ごした)<sup>7)</sup>

マンズフィールドはこの前年に肋膜炎に罹り、フランスのバンドルやイギリスの南西端、コーンウォールで過ごしていたが、1918年の6月の末にはマリと共にロンドンへ戻っている。デ・ラ・メアが来訪したのは、その際であろう。当時の彼女の日記には、体調の悪化を訴える暗い記述が多いのだが、デ・ラ・メアと過ごしたこの日の午後は、マンズフィールドにとっても確かに、至福の時であったに違いない。この年の末から彼女の体調は一層悪くなり、翌1919年にはイタリア、1920年にはフランス、そして1921年にはスイスへと転地療養しなければならなくなった。もはや落ち着いてロンドンで過ごすことはできなくなり、デ・ラ・メアとも会う機会はあまりなくなっただと思われる。それゆえかえって彼女にとっては、日記や書簡にデ・ラ・メアの名を記す機会が増えた。そして、そこには常に、彼女の深い想いが込められている。

I've just finished a story called *The Ladies Maid* which I'm sending for the paper. ... *This* one I'd like you and de la Mare to

like — other people don't matter. (たった今文芸誌に送る『小間使い』という作品を書き終えたところです。・・・この作品があなたに気に入ってもらえると良いのですが、それからデ・ラ・メアにも——他の人はどうでも良いのです。) (J・M・マリ宛、1920年12月6日付)<sup>8)</sup>

Did one know all the wrong people? Is that why nobody remains? Not a soul remains to me — not one — except Delamare whom I never knew when I was there ... (知り合った人はみんな間違った人だったのでしょうか。だから今はもうみんななくなってしまったのでしょうか。私には誰もいません——一人も——あそこには、決して深く知らなかったデ・ラ・メアだけは別ですが・・・) (オトリーン・モレル宛、1921年2月2日付)<sup>9)</sup>

But speaking of this reminds me instantly of DeLaMare, who understands it so perfectly... He is one of the people whom I have most enjoyed meeting in Life. There is no one like him. (けれども、このような話をするとすぐにデ・ラ・メアのことを思い浮かびます。あの人なら、このことが完璧にわかるのです。・・・あの方は私が生涯に出会った中で、最も喜ばしい人です。あのような人は他にはいません。) (オトリーン・モレル宛、1921年12月27日付)<sup>10)</sup>

いずれも、フランスやスイスの療養先で記された書簡である。ここからは、夫のマリと同等の、時にはマリ以上の、文学的の伴侶としてデ・ラ・メアのことを想起するマンスフィールドの静かだが熱烈な気持ちが読みとれる。しかしながら、現存するマンスフィールドの書簡の中で、デ・ラ・メアとの関わりにおいて、最も重要と思われるのは、次の一通である。

I return DelaMare's letter. I long to hear of your time with him. Its very queer; he haunts me here — not a persistent or substantial ghost but as one who shares my(our) joy in the *silent world*. Joy is not the word: I only used it because it conveys a stillness — a remoteness — because there is a faraway sound in it. (デ・ラ・メアの手紙をお返します。あなたがあの人とお会いになった時のことをぜひお聞かせください。本当におかしなことですが、ここで私はあの人に取り憑かれています——執拗な、はっきりとした亡霊としてではなく、私(達)の「静寂の世界」で楽しみを分かちあう相手として。楽しみという言葉は当たっていないかもしれませんが、私がこの言葉を使うのは、この言葉には静けさ——ある遠さ——があって、遙かなるものの響きがあるからです。) (J・M・マリ宛、1920年10月18日付)<sup>11)</sup>

マンズフィールドにとってデ・ラ・メアは、この世にしながら、同時に、遠く遙かな夢と神秘の世界に住まう詩人であった。そして彼女の「静寂の世界」を訪れ、想像力の絆によって理解を共にできる唯一無二の存在だった。その意味で、デ・ラ・メアの詩「KMに」は「静寂の世界」への旅の貴重な記録なのである。デ・ラ・メアは確かにマンズフィールドの髪や瞳の色をこの詩に記しているが、彼がこの詩で本当にうたいあげたかったのは、黒い髪や瞳の奥に彼女が秘めている「静寂の世界」であり、そこで共に過ごす楽しみであった。

マンズフィールドと同じように夢の世界を愛したデ・ラ・メアは、しかした、何よりも夜の闇や月の青い光の中に真実の世界を見る神秘主義者であった。彼の、そうした影や闇への愛着が、マンズフィールドに影響を与えなかったとは考えがたい。今、最後に引用した書簡には、引

用した部分の直後に '*Everything has its shadow*' (すべてのものに影がある) という彼女の有名な言葉が記されている。彼女のもう1つの有名な言葉 '*crystal clear*' 「水晶の透明」の明るさは、彼女の天性のものだっただろうが、そこに影が加わることにより、彼女の文学の世界は一層の奥行きと深みを獲得するようになった。無論、デ・ラ・メア以前にも、ほの暗い人生の苦みを表現しているという点では、チェーホフという大きな存在があったが、社会的、人道的なチェーホフの文学性とは異なる、神秘的、夢幻的な美質の発見という意味で、光の世界に勝る影の世界の豊かさを示したデ・ラ・メアの影響は決して無視できない。

マンズフィールドがデ・ラ・メアについて残している言葉は、敬愛の情がこもったプライベートなものばかりだが、デ・ラ・メアの方は、批評家としても一流だった彼らしく、マンズフィールドの作品について、賞賛しながらも精緻な批評を残している。

The spirit that surveys its field is delicate yet intrepid, fastidiously frank. To her very finger-tips she is in love with beauty, and securely so because her love springs out of her devotion to truth.

Whatever the actual medium of her story.....the pitch of mind is invariably emotional, the poise lyrical. None the less that mind is absolutely tranquil and attentive in its intellectual grasp of the matter in hand. And through all, Miss Mansfield's personality, whatever its disguises, haunts her work just as its customary inmate may haunt a vacant room, its *genius* a place. (世界を見渡す精神は繊細だが、また大胆でもあり、率直なので好みのうるさい感じも与える。彼女はからだの隅々まで美に対する愛に満たされているが、それでも危ういということはない。なぜなら、彼女の美に対



する愛は、真実に対する献身から生じているからだ。

彼女の物語はどのようなものであろうとも・・・精神が絶えず感情的に揺れ動いているが、平衡が保たれた場合は抒情的になる。にもかかわらず、物事を知的に把握する点では、精神は沈着冷静で慎重である。そうしたものの全てを通して、マンズフィールド嬢の個性は、たとえ外観がいかに違ったものに見えようとも、その作品の中に必ず現れて来る。それはちょうど、ある人物が空いている部屋にいつものように入出入りするのに似ている。天賦の才が、そこに現れるのだ。) <sup>12)</sup>

彼女の作品に登場する人物の心の揺れ動き・・・その振幅の大きさ・・・に幻惑されることなく、それを冷静に観察し描き出している鋭いまなざしが、作品の奥底に常に輝いていることを見抜いている点で、デ・ラ・メアのこの言葉は、マンズフィールドの本質を見事にとらえている。何より1921年当時既に『幸福、その他』(*Bliss and Other Stories*)の発刊直後である)彼女の作品に知的な特質を認めている点で、今日でも尚傾聴に値する深い洞察に満ちた評言と言える。

デ・ラ・メアは、批評家であり、小説家でもあり、児童文学作家でもあって、各分野で目覚ましい活躍をしたのだが、本質が詩人であることに異論を唱える人はいないだろう。彼の処女作は『こどものうた』(*Songs of Childhood*)という童謡集であるし、それから10数年後に完成した『孔雀パイ』(*Peacock Pie*)は、同じく童謡集であるが、静寂の神秘と闇の象徴に満ちた自らの夢幻世界を確立した彼の代表作であるのみならず、イギリス古来のマザー・グースの伝統を受け継ぎながら、独自の詩法でファンタジーの世界にモダニズムの領域を切り開いた一大傑作である。

そのような彼が、マンズフィールドの若き日の「こどもの詩」に目を止めたとしても不思議はないし、彼が、マンズフィールドの死後に刊行された『詩集』(*Poems*)中の、この幻の処女作をどう評価したかは、興

味深いところである。実際、マンズフィールドの評伝の嚆矢となったマリとR・E・マンツの『マンズフィールドの生涯』(*The Life of Katherine Mansfield*)には、デ・ラ・メアが彼女の「こどもの詩」を“as true to childhood as any child poems that we know”(これまでのどんなこどもの詩よりも、真実のこどもの世界をうたっている)<sup>13)</sup>と評したと記されている。この言葉は、以後もデ・ラ・メアの評言として信じられて来たのであろうか。マンツとマリの評伝から半世紀以上経た1985年に出版されたノラ・クローンの『マンズフィールドの肖像』(*A Portrait of Katherine Mansfield*)にも同一の引用がなされている。<sup>14)</sup>しかしながら、どちらの書にも引用の出典が無く、この評言がデ・ラ・メアのものであるという証拠は実は得られなかった。そして今回、調べてゆくうちに、これはデ・ラ・メアのものではないことが明らかになった。この言葉は1923年12月20日付の『タイムズ・リテラリー・サプリメント』に掲載されたマンズフィールドの『詩集』評に含まれており、評者の名は記されていないが、問い合わせたところ、評者はハロルド・チャイルドという作家、批評家であることがわかった。<sup>15)</sup>チャイルドはデ・ラ・メアより4歳ほど年長で、『タイムズ〜』では40年以上の長きに渡り、詩を中心に音楽、美術等広範囲な批評を担当した人物であって、その真摯で公正な批評の態度を惜しまれつつ、1945年にこの世を去っている。『タイムズ〜』の書評は匿名であって、確かにデ・ラ・メアも同時期に評を担当し、マンズフィールド自身、デ・ラ・メアのそうした評を興味深く読んでいたことなどから、<sup>16)</sup>『詩集』の大変好意的な評において、マンズフィールドとデ・ラ・メアの結びつきが生じ、マリでさえも誤解したのだろうか。無論、『詩集』及び「こどもの詩」の意義をいち早く正確に認めているという点で、チャイルドの批評はその価値を失ってはいない。デ・ラ・メア自身も、おそらくこの評を読んで賛同したのではないかと思われる。

1922年8月、マンスフィールドはスイスの療養所で遺書と思われる手紙をマリーに宛てて書いている。その中で “I seem, after all, to have nothing to leave and nobody to leave things to. De la Mare I should like to remember and Richard.” (結局、私は何も残したくない、誰にも何も残したくない。けれど、デ・ラ・メアには何か贈りたい、それからリチャードにも)<sup>17)</sup>また、これとは別に、友人らへの形見分けを記した遺書もしたためたらしく、そこには、デ・ラ・メアには本を一冊と記されている。<sup>18)</sup>それから5ヶ月、マンスフィールドは病と闘い、ついにその34年の短い生涯を終えた。先述したように、彼女の死後、マリーは彼女の遺稿を整理し、出版した本の一冊『鳩の巣、その他』に、デ・ラ・メアへの献辞を付した。マンスフィールドの願いは、マリーの心遣いにより、彼女の望んだ以上の形でかなえられたと言って良いであろう。

## 注

- 1) *The Katherine Mansfield Notebooks vol.2* (ed. by Margaret Scott, Canterbury, New Zealand: Lincoln University Press, 1997), p.312. マンスフィールドの自筆原稿による最新のテキストとして、この版より引用した。尚、*Journal of Katherine Mansfield definitive edition* (ed. by John Middleton Murry, London: Constable, 1954) にも、同じ日付の箇所に、同じ記載がある。
- 2) *Ibid.* p.318.
- 3) *The Letters of John Middleton Murry to Katherine Mansfield* (ed. by C.A.Hankin, London: Constable, 1983), p.227, p.231.
- 4) F.A.Lea, *John Middleton Murry* (London: Methuen, 1959), p.344.
- 5) *The Collected Letters of Katherine Mansfield vol.1* (ed. by

- Vincent O'Sullivan and Margaret Scott, Oxford: Clarendon Press, 1984), p.210.
- 6) *Katherine Mansfield: The Memories of LM* (London: Michael Joseph, 1971), p.134.
- 7) Walter de la Mare, *Selected Poems* (London: Faber & Faber, 1973), p.80.
- 8) *The Collected Letters of Katherine Mansfield vol.4* (ed. by Vincent O'Sullivan and Margaret Scott, Oxford: Clarendon Press, 1996), p.136.
- 9) Ibid. p.171.
- 10) Ibid. p.356.
- 11) Ibid. p.75.
- 12) Jeffrey Meyers, *Katherine Mansfield: A Biography* (London: Hamish Hamilton, 1978) p.212.
- Antony Alpers, *Katherine Mansfield* (London: Jonathan Cape, 1954) p.300-1. 尚、この評はA.Alpersの注によれば、*The Athenaeum*, January 21, 1921に掲載された。
- 13) R.E.Mantz & J.M.Murry, *The Life of Katherine Mansfield* (London: Constable, 1933), p.246.
- 14) Nora Crone, *A Portrait of Katherine Mansfield* (Devon: Arthur H. Stockwell, 1985), p.45.
- 15) News International plcのEamon Dyas氏の調査により判明した。尚、調査の仲介をして頂いたうえに、沢山の情報を収集し、協力して頂いた筆者の長年の友人で、ブリティッシュ・ライブラリーと関係の深い調査員Helen Gregoryさんに心より感謝申し上げたい。
- 16) *The Collected Letters of Katherine Mansfield vol.1*, p.210.  
*The Collected Letters of Katherine Mansfield vol.3* (ed. by

Vincent O'Sullivan and Margaret Scott, Oxford: Clarendon Press, 1993), p.117.

17) Alexander Turnbull Library, MS Papers 4000: 40.

18) *Katherine Mansfield: The Memories of LM*, p.207.

Antony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield* (Oxford: Oxford University Press, 1982), p.366.